

TATとロールシャッハ・テスト

—相似点と相違点—

中京大学心理学部 鈴木 睦夫^{注1}

TAT and Rorschach test - common features and differences

SUZUKI, Mutsuo (School of Psychology, ChukyoUniversity, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya 466-8666)

The present paper attempts to clarify common features and differences between the TAT and Rorschach test in terms of several aspects that could be common to all psychological tests. These aspects are the basic nature of the test task, material comprising the test, the response-producing process, level of interpretation of material, influence of culture on responses and the psychic layer or aspect to be focused on. Both tests are based on and activate innate human tendencies to identify objects encountered. The fact that TAT material could not be created without any intention may not only direct the subject toward correct interpretations of pictures, but also may limit the potential for quantitative analysis of response contents, due to qualitative differences. Subjects examining an ink blot in the Rorschach can call up anything from among their repertoire of experience, but subjects examining a picture in the TAT make a narrower choice among various human situations psychologically close to them. "Adequate" levels of material interpretation exist for each test, and normal levels of interpretation can be too high for one or too low for the other. Factors playing an important part in causing M responses in the Rorschach may include body schemata, and the identification of what human faces express, which is so important in the TAT, may also depend on some specific inborn organization. Things that are seen vividly in terms of color, perspective, surface quality and the like in the Rorschach give an impression of subject affinity and a resultant high symbolic value, while in the TAT the unconscious grasping of certain implications and values of an object may determine the story content. The influence of culture on responses is obvious with both tests, and the meanings of popular responses should be examined from this perspective. What aspect or layer of the mind both tests focus on cannot be simply determined.

Key words: TAT, Rorschach Test, comparative examination

はじめに

先ごろ筆者は、ロールシャッハ・テストに関するある研究会^①に講師として招かれ、ロールシャッハ・テストをTATと対比させながら論ずる機会をもった。以下はそのときの講演内容をもとにして考察をいくらか広げ、かつ精緻にしたものである。

筆者は人からTATのスペシャリストとして見られているし、自分でもそう思っている。しかしロールシャッハ・テストにも以前から少なからず関心を向けてきた。それで、ヘルマン・ロールシャッハの名著『精神診断学』を翻訳したり、同一人物のTATとロールシャッハ・テストの比較検討を行なっ

たりしてきた(鈴木, 2002)。両テストに共通するものと相異なるものとを明らかにしつつ、それぞれをより深く認識することは、自己の主要な研究テーマの一つであるとみなしている。それで先述のようにロールシャッハ研究会に講師として招かれ、また内容も先述のようなものとなったのである。

もとより、TATとロールシャッハ・テストという、二つの代表的な投影技法の相似点や相違点について確かなことを言うためには、それらが実際にもたらすものについての緻密な比較検討に基づく必要がある。それらが提供するデータ(反応)の多種多様さとそこに含まれる意味の広範さは、机上の推論をはるかに越えるものだからである。

したがって、筆者がここに提示するものは、今後果たされるべき課題の前奏曲に過ぎないと言える。

注1 musuzuki@lets.chukyo-u.ac.jp

しかし、実際のデータの森に入っていくまえに、両テストの相似点と相違点を可能な限り認識しておこうと努めることはむだではあるまい。これは、言うなれば、素朴に知っているものの明確な意識化の試みである。TATとロールシャッハ・テストのそれぞれについて具体的に知っている人にとって、両テストが相異なることは自明であると言える、猫と犬が相異なることが自明であるように。しかし猫と犬が違う動物であると知っている幼児が、両者の違いを明確に言えるかということ言えはしない。両者の比較が可能な、あるカテゴリーを設定し、それに照らして、改めて反省的に両者の違いを捉えてこそ——たとえば、空間移動という面から、猫は木や塀の上に登ることができるが、犬はできないというように——認識の名に値しよう。

筆者がこの小論において成さんとすることも、似たようなことである。読む人は、ここに言われていることは、言われる前から知っていたという感想をもたれるかもしれない。しかし意識化の努力によって、それなくしては得られにくい認識ももたらされるのではないだろうか。そしてそれはデータの森で方向を喪失してしまいそうなときの再オリエンテーションを可能にしてくれることが期待されるのである。

さて以下の論述に当たって、筆者は、相似点と相違点を別個に取りまとめて論ずることはせず、心理テスト一般に関するいくつかの論点をカテゴライズし、それらのカテゴリーごとに、両テストの相似点と相違点を検討するという方策をとった。その理由は、大きな相似点の先に小さな相違点があるというふうに、相似点と相違点を別個に扱うことが困難であったからである。

I 課題の本質特徴

TATは、その非短縮形 Thematic Apperception Test (主題統覚検査) が示すように、描かれた絵の場面を apperceive (統覚する) ように求める検査である。他方ロールシャッハ・テストの原典『精神診断学』には「知覚診断的実験の方法と結果」という副題の他に、さらに Deutenlassen von Zufallsformen, すなわち、偶然図形 (非意図的図形) を deuten lassen (解釈させる, 判断させる) ことという、そのものずばりの副題が括弧つきで付されている。

Apperception (統覚), apperceive (統覚する) は、それぞれ interpretation (解釈), interpret (解釈する) と同義とみなしてよいことが、Morgan, C.D. と Murray, H.A. (1935) の共著論文によって確かめられるし、deuten も、独英辞典を引けば、interpret という英語に訳されることがわかる。このように、どちらのテストも、視覚的対象を解釈させるものであるという点で共通しているのである。TATは、絵がどのような場面を表しているかを解釈させ、ロールシャッハ・テストは、Was könnte dies sein? と問うて、不定形のインクのしみが何かを表しているとしたら何を表しているかを解釈させる。

ところで、これらの課題は一見日常経験から縁遠い、不自然で強引なものという印象を与えるが、実はそうではなく、人間本来の性向に沿った、ただそれに一押しを加えただけのものと言えるのである。

たとえば、われわれは雨漏りによってできた天井や壁のしみをくり返して見ているうちに知らず知らず何かを連想して、自分なりに納得しているものである。しみを毎日見ていながら何も思わないという人の方が少ないのではないだろうか。もちろん個人差はある。刻々と形を変えている雲や川原の小石からあれこれの対象を連想して楽しむ人もいれば、ほとんどそういう楽しみを示さない人もいる。また、年齢による差もあろう。子どもは概して、不定形のものから想像を広げるのを好むと言えるだろう。Rorschach の子どもの頃には、インクのしみが何に見えるかを言い合う遊び (= Klebsographie) が行われていた。つまり、子どもにとっては遊びとして自発的に行われていたものが、心理学的テストに変貌したということである。

絵の解釈の方はどうであろうか。これまたきわめて自然な人間の性向である。われわれは絵を見るとき、まず、何が描かれてあるかに関心がいき、もし人間が描かれてあると、その人は何をしているのだろう、どんなことを思っているのだろうと想像し、複数の人間が描かれてあると、彼らはどういう関係で、何が起きているのだろうと想像する。これらの心の動きは、自分でも気づかずに生じるのである。気づくときは、何が描かれてあるか同定できないとき、描かれてある人間が何をしているのか見定めがたいときである。このとき、われわれは、一種のフラストレーションを感じて、絵の前から立ち去る。このフラストレーション、不快さこそ、われわれの、

わかりたいという自然な欲求の存在を証明しているのである。因みに、一般人にとってこのようなフラストレーションを与える作品を描く画家の代表がピカソである。ピカソの多くの絵は、何が描かれてあるかわからないほど抽象的なわけではないが、人物が何を思っているかを容易にわからせてくれるものではない。そういうことと、一際抜きん出た天才であることもあって、彼は「わけがわからない絵」を描く画家の代名詞となったのである。

それはさておき、絵を見たら描かれてあるものを解釈するという人間の自然の性向は、「絵解き」ということばの存在そのものから明らかである。昔から人間は、絵によって人間のできごとを表そうとし、また、絵を見て、そこに描かれた人間のできごとを汲みとろうとしてきた（「絵解き」はこれら両様の意味をもつのである。『大辞林』より）。西欧の聖書に題材をとった絵、わが国の種々の絵巻物を思い浮かべてみるだけでいい。

以上のように、TATもロールシャッハ・テストも、その課題は、人間の、対象をわかろうとする本来的な性向に一押しをくれるものにすぎないのである。極端に言えば、ロールシャッハ・テストの、何に思えるか（見えるか）言ってほしいという教示も、TATの、これまでのことにも、これからのことにも触れるようにという教示も本当は不要なのである。不定形のものを見たら、言われなくても、何に似ているかを考えめぐらし始めるし、また、絵の場面は、一連のできごとの1コマを表したものにすぎず、まえのできごと、あとのできごとに触れずしてそれを語ることなど本来不可能なのは自明だからである。

さて、人間は、目にする対象をわかろうとする本来的な性向をもってきていると言ってきたが、これはどこからくるのであろうか。おそらくその淵源は、やや遠く、生物としての生存・適応上の必要に求められるであろう。生物は常に自身の生命の存続・発展を目指している。身の回りに自分の生存を危うくするものはないかどうか常に気を配っているし、また、同種の仲間が生存に利する何かを得ていないか——たとえば、豊かな、あるいは美味しい食物にありついていないか——と絶えず注意を払っている。生命の存続も発展もともに大事だが、まず生き延びることが優先しよう。それで、身の回りの安全に最大の関心を払う。

ところで、安心できる状況とは、馴染みのものに取り囲まれている状況である。未知のものは未知と

いうだけで、いくらかの不安を惹起する。それで生物は、自分が遭遇する対象が、自分が知っている馴染みのものに属するか否かを知らうとする。もしそれが馴染みのない、不可解なものであるとわかると、恐慌に陥る。たとえそれがまったくの新奇なものではなく、馴染みのものの外観を呈してはいても、馴染みのない振舞いを示すと、生物はやはり恐慌に陥る。脳の一部の切除手術を受けた猿が仲間たちのなかに戻されたとき、その猿の、人間には気づかれないような奇妙な振舞いに気づいた仲間の猿たちの間に、パニックが広がっていったという事実が報告されている（下條, 1999）。

以上のことからわかるように、生物は本来身の周りの対象をわかろうとすると言っても、対象をその固有性や独自性のままに認識しようとしているわけではなく、自己にとって有害なものか無害なものか、有益なものか無益なものか見分けようとしているにすぎないとも言える。その意味で、「わかる」には identify ということばを充てるのがふさわしいであろう。因みに、identify は、identify A with B という使い方をし、これは「AをBと同一視する」と訳されるが、未知なるものAを既知のものBと同一とみなすことによってAを見分ける、あるいはそのこと自体がAを見分けることに他ならないとも言えよう。ものを見分ける第一歩は、それを既知の何と同じか、あるいは似ているかを明らかにすることである。

では、identify oneself with B という使い方をする場合はどうなるのであろうか。これは「(自己を)Bと同一視(同一化)する」と訳されるが、同一視(同一化)も、本来自己の見分け、見極めを含蓄しているともみなすべきなのだろうか。考えてみれば、われわれは、ある人、ある物を好いたり嫌ったりすることで自己を露にしているのであり、それこそが反省的、抽象的に捉えた自己よりずっと確かな自己であるとも言えるのである。つかみどころのない自己の正体を見極めるのに、あれこれの他者をもってするという見方は含蓄に富むものに思える。

以上は、現実生活を念頭において、そこで示される対象をわかろうとする人間本来の性向について述べたものであるが、その性向は、インクのしみ、絵や写真など、生存上の問題と直接にはかかわらないものに対しても、切実さは劣るものの、やはり示されるのである。一押ししてくれなければならないのは切実さの不足のゆえであるとも言えよう。

さて、わかろうとする対象は、TAT とロールシャッハ・テストでは異なるのであるが、これを論ずるには、まず両テストの素材について、より詳しく述べておく必要がある。

II 素材

1. 成り立ちと性質

ロールシャッハ・テストにおいては、インクをたらし紙を二つ折にしてできる、ほぼ左右対称なしみ模様が素材であり、TAT においては、既存の、あるいは試作された絵画作品や写真作品が素材である。両者の決定的な違いは、ロールシャッハ・テストにおいては、素材は、非意図的、偶然的にできあがったものとみなしうるのに、TAT においては、そうは言えないということである。先に TAT は絵解きであると言ひ、辞書に載っている絵解きの2つの意味を紹介したが、まさにその1つの意味からしてそういうことと矛盾するのである。絵や写真が作品である限り、描き手や撮り手のなんらかの意図なしにできあがったとは言えない。たとえその意図が明確に意識されてはいないにしてもである。

ここで、ロールシャッハ・テストの場合インク・プロットの作成の過程には意図は働いていないにしても、多くのインク・プロットのなかから10枚を選択する過程で、意図が働いているのではないかという反論がなされるかもしれない。しかし選択は統計の結果であり、その際意図は働いているにしても、作成過程での意図と同日に論ずるわけにはいかないであろう。

さて、素材が偶然的にできあがったものとなんらかの意図があつてはじめて生じたものという違いは、テスト課題の遂行やその結果処理にどのような違いをもたらすのであろうか。

2. 素材の性質が被検者の反応態度へ及ぼす影響

作成者の意図が前提とされた作物に対しては、おのずからその意図を忖度する態度が生じようし、偶然的産物に対しては、そういう態度から自由でいられよう。実際絵画作品や写真作品を見るとき、われわれは、描き手はこの絵によって何を表現しようとしたのだろう、撮り手はこの写真で何を伝えようとしたのだろうと、とくに意識することもなく推し測っている。TAT においても然りで、それゆえ TAT の課題遂行は正答追求的性格を帯びるといえる。作

成者の意図を正しく見極めたか否かが不安の源となり、自己の能力に強い不安をもつ人は、物語作りに用心深くなり、具体性に乏しい物語を作るに終ったり、複数のプロットを提示し、一つに絞れないで終ったりするであろう。

他方ロールシャッハ・テストでは、正答も誤答もない。誤答の懸念をもたずにすむばかりでなく、解釈の自由さを積極的に楽しむことができる。しかし、甚だしく自信に欠ける人、また、猜疑心の強い人は、ロールシャッハ・テストにおいても、正答があるのではないかと疑ひ、反応に対し臆病になったり、拒否的になったりするであろう。

3. 素材の性質が結果の処理の仕方に対してもつ意味

素材が偶然的産物であるか、作成者の意図があつてこそ生じるものであるかという違いは、質的な同質性・異質性の問題を提起する。いくつかのものが、基本的に同じ手続きで生じたものならば、それぞれは同質であると言え、反対に、手法もまちまちで、さらに、そこに作成者の個人的な意図が反映されているとしたら、それぞれは異質であると言わねばならないであろう。

さて、いくつかのものがそれぞれ同質であるか異質であるかの違いは、量的な扱いの可・不可に関係してくる。本来量的な扱いが可能なのは、扱われる対象が質的に同じと認められる場合である。身近な例でいうと、公園の砂場に2人の子どもと1匹の犬がおり、2個のスコップと1個のバケツがあつたとして、それぞれの数を足して6とすることはまずあるまい。食卓に並ぶ魚の煮物、野菜のおひたし、冷やっこ、それにみそ汁は、4品と足し算されるが、それはそれぞれが食品として、またおかずとして同質化されるがゆえである。

ロールシャッハ・テストにおいては、形式分析といわれる量的分析が重要であるが、ひとつひとつの反応の記号化、その集計、比率計算などの量的分析を意味あらしめているのは、テストの素材、つまりインク・プロットが同質だとみなされうるのである。もちろん10のインク・プロットはそれぞれ形態、濃淡、彩色などの点で異なる。しかしすべて、何かを表そうという作成者の意図が加わっていない、紙にインクをたらし二つ折にしてできあがったものであるという点で共通しており、同質なのである。

他方 TAT のそれぞれの絵（写真）は絵（写真）であるという点でのみ共通している。しかし本来絵

（写真）は意図なくして生じるものではないので、この共通性はほとんど意味がない。それぞれまったく異なる意図のもとに生じたものである。それゆえ、それぞれの絵（写真）に対して作られる物語も、作成者の意図に多かれ少なかれ制約されたそれぞれ異なった種類のものにならざるをえない。このようなTATにおいて量的分析は可能なのか、可能だとしたらどのような側面についてであろうか。

TATの反応（物語）の分析の仕方を、着目する側面によって、形式分析と内容分析に分けることができる。前者は、物語がいかにかに語られるかに着目するものであり、後者は、何が物語られているかを考慮するものである。物語の語られ方とは、たとえば、たいして内容のない物語を多言を費やし、冗長に語っているか、それとも反対に、適切なことばで順序よく内容豊かな物語を構成しているかということや、できごとの細部まで詳しく具体的に語るか、それとも、全体的に具体性が乏しい語り方をしているかということなどである。これらの特徴は、一つの絵に対しての物語に認められるだけでなく、すべての、あるいは多くの物語に共通に認められる可能性のあるものであることは容易に察せられるであろう。したがってTATの反応（物語）の形式面に関しては量的分析が可能であることがわかる。

さて、それ以外の量化はTATでは可能だろうか。ここで言及しなければならないのは、Murrayによって提唱された欲求-圧力分析（need-pressure analysis）である。それは量的分析の名に値しよう。欲求-圧力分析とは、人物（主人公）の抱えている欲求（need）と彼（彼女）に作用する人的物的環境要因である圧力（press）をチェックし、またそれらの強度を評定する方法であるが、一つの絵解きをそこまで分解すれば、記号化やその集計も可能であろう。しかし問題はそれにどれほどの意味があるかということである。欲求-圧力分析は、やがて行う人が誰もいなくなったということが、その効力の無さを証明しているとも言えるのであるが、筆者には、TATの本質は絵解きであるという認識の徹底性の不足が問題であるように思われる。結局TATにおけるデータ（物語）の分析・解釈とは、これこれの絵に対してこれこれの絵解きないし場面把握がなされたのはなぜかを問い、その条件としてのパーソナリティ要因を明らかにしようと努めることに他ならないのであるが、それには物語中の「主人公」の「欲求」や「圧力」を全体の状況から切り離して

拾い上げていけばいいというようなものではないのである。そもそも「主人公」の決定からして、Aという人物でなくBという人物が「主人公」にされたのはなぜかということが重要な問題として問われねばならない。このことを含めて、絵全体はどういうふうに解されているかということを常に根幹に据えて物語を分析していく必要があるのである。その際いくつかの絵に対するいくつかの物語に共通してある種の場面把握が浮かび上がってくることがある。たとえば、カード1で「男の子が家に代々伝わるヴァイオリンを壊してしまい、父親に叱られるはしまいかと悩んでいる」という物語を作った女子高生が、カード6GFで「映画館で恋愛映画を見ていた娘が、娘のことが心配であとをつけてきた父親に声をかけられて驚いている」という物語を作り、9GFでは「一方の女性が、近づくのを禁止されている古い崩れ落ちそうな館に入って行くのを、彼女のあとをつけてきた他方の女性が見ている」という物語を作り、さらにカード11では、「山奥を旅する若者が、人のことばを話すことができる幻の竜と出会い、これ以上奥に入ることを止められるが、同時に竜から、竜の体内の不思議な宝石をその体内に入れて取り出すように請われ、若者はそうすることで、竜を苦痛から解放し、自由に空を飛べるようにするとともに、自分は宝石を魔よけにして旅を続けた」という物語を作った。読者は、これら4つの物語に共通するものを感じ取られることだろう。それは、あえて言うなら、子どもが大人の世界を強い好奇心をもって覗くことであり、また、子どもはそういう行為を大人から見咎められることを恐れていることである。これらを「テーマ」と呼ぶなら、同じテーマが4つの物語に認められたわけであり、4という数字に重きをおくなら——仮説の根拠が多いこととして——これは量的観点に立っていることと言えるかもしれない。しかしこのような量的把握は前もってチェック項目を設けておいてやれるものではないことも理解されるだろう。物語を読み比べることによってはじめて浮かび上がってくる、かなり抽象度の高いものが問題になっているのであり、それは、感じ取ったあとでも、言語化することはそう易しくないのである。TATではこうしたテーマが重要なのであるが、それは予め定めた手続きによって量的に捉えることができるのではなく、欲求-圧力分析という量的分析では、直観的に把握されるものが却って見えにくくされる可能性が大いにある。

反応例を引くなどして、多少くたくたくなくなってしまったが、要は、ロールシャッハ・テストにおいてそれぞれ異なる模様インクのしみに与えられる反応のそれぞれをいくつかのカテゴリー別に記号化し、それを集計することと、TATにおいて、それぞれ異なる意図の下に生じた絵ないし写真に対してなされる個々の絵解きを、人物（主人公）の内的欲求と外的要因（圧力）に分解し、それぞれ詳しく記号化し、集計することとを同列に論ずることができようかということである。筆者はこれに対し否定的見解をとる者である。

Ⅲ 課題達成における心的プロセスまたは反応産出のメカニズム

前章ですでに結果の処理にまで話が及んでしまっただが、ここでまた、より基本的な問題に立ち返りたい。

両テストとも、提示された対象を解釈することを被検者に要求しているのであるが、ロールシャッハ・テストでは「何であるか」が問われ、TATでは「何が起きているか」が問われている。それぞれのテストにおける反応産出にはどのような心的機能が要され、どのような心的プロセスが生じているのであろうか。

Rorschach (1921) は、自らの主著『精神診断学』の副題を「知覚診断的実験の方法と結果」としたように、テスト課題で要求される心的機能は知覚であると考えていたようである。主著のなかで、実験は知覚のテストであり、想像力のテストではないとも言っている。しかし Binswanger, L. (1923) は、それに異議を唱えて、知覚というより空想ないし想像が問題になっていると述べている。

筆者も、これまで述べてきたことから察せられるように、ロールシャッハ・テストにおいては、知覚機能以上のものが問題になっていると思っており、Binswanger と意見を同じくする。しかし、そもそもインクのしみをあるものと解するに至るにはどういうプロセスを辿るのであろうか。

われわれが現実生活のなかでもものに接するとき最初にすることは、それが何であるか見分けることであるが、それは、すでに何ものであるものをそのものとみなす (identify) ことである。そして見慣れたものにとり囲まれているふだんの日常生活においては、このことはそう困難ではない。ものの形が

定かでなくなる黄昏ときなどには、それに消費する心的エネルギーの大きさに気づかせられるが、それでもふつうの生活においては、目にするものが何が何やらまったく見当がつかないということはめったにない。一定の比較的狭い枠内での不確定さにすぎない。

しかしロールシャッハ・テストのインクのしみに接するときには事情が異なる。インクのしみは現実にはたんにインクのしみにすぎず、それゆえ、それを何かとみなすことに、厳密には identify ということばを充てられない。インクのしみはインクのしみであるがゆえに、何に見立てられてもかまわない。そういう前提で、それは見る人の心に何かを触発する、あるいは連想させるのである。このことは、自由という気楽さを生むとともに、依拠するものがないという不安を生みもする。ここに個人差が現れる。

今インクのしみを何かに見立てるプロセスを辿ってみよう。インクのしみによって内的なあるものが触発ないし連想されると、今度はそれがインクのしみの特定の細部の点検を促し、好都合なものを発見させ、いよいよそれらしく思わせたり、逆に不都合なものを見出させ、それは採用を保留されたり、棄却されたりする。こういう一種の往復運動がいくつか生じて、最終的な決定に至るのであるが、この運動自体が非常に迅速であるため、決定はほとんど一瞬になされるという印象を与えることが多い。このことから確実に言えることは、一方にしみの模様があり、他方に内的なイメージないし表象があり、どちらが欠けても当の反応は生じえなかったということである。模様がなければ内的なものは限定を受け、方向づけられ、当の反応に結実することはなかったし、内的なものがなければ、インクのしみはたんなるしみに留まるしかなかったのである。

ところでインクのしみによって触発される内的なものとはどういう性格のものと言えるのであろうか。ごく一般的に、それは当人にとって親近なものと言えるであろう。親和という肯定的な意味での近さが思い浮かべられやすいので、あえてそのことばを避け、親近というのである。なぜなら、人にとって、嫌いなものや恐れるもの、すなわち否定的な感情を惹起するものも、心理的に親近とみなすのが妥当と思われるからである。さらに、正負どちらの意味でも、とくに強い感情価を帯びていず、ただよく馴れ合っているがゆえに、親近ということばが当たるものもあるのである。

上述のことから、ロールシャッハ反応とは、膨大な「知っているもの」のうちの「親近なもの」のなかから、さらに選ばれたものであると言える。それゆえ、それは少なくとも被検者本人に知られているばかりでなく——これを言うだけでは、パーソナリティ・テストとしての意味はない——彼または彼女に好まれているか嫌われているかするものを表している可能性があり、これによってパーソナリティ・テストとしての意義を得る。しかしこれだけではまだ意義は大きくない。見立てられたもののたんなる事物的内容を超えて、そのさらに詳しい在りようを考慮することによって、被検者の好みや恐れや嫌悪の対象はいっそう精緻に把握されるのである。実際の技法の上では、このことは、見立てられた生物や事物の運動や状態、色、立体感や材質感を考慮に入れることに相当するのであるが、これについてはあとで述べようと思う。あまり先を急がないで、ここでは好きなものや嫌いなもの——あるいは、志向するものと言っても、敏感に応ずるものと言ってもよい——は、特定の属性を含んだ、あるいは特定の属性ゆえに際立った生物や事物であるとおきたい。

次にTATで物語が生ずるプロセスを考えてみよう。

TATにおいてもやはり、絵が語り手のうちにある膨大なイメージのうちから語り手にとって親近なものを触発し、それが批判的にチェックされ、採用されたり、棄却されて新たに触発されたものがまた批判的に点検されるというような内的プロセスが進行すると見えよう。ただ、ここでは触発されるイメージは人間場面（human situations）のそれであり、ほぼそれに尽きる。この点がロールシャッハ・テストと異なる。ロールシャッハ・テストのインクのしみは何に見立てられてもよい。森羅万象ことごとくが呼び出される可能性を与えられている。膨大なもののなかから何を選んでよいというのは、このうえない自由を感じさせる反面、1つに絞込まねばならない——もちろんこれは1つのしみの1つの領域に関してのことである——という点ではなほだしく不自由である。現実にはひとりの人間の知の範囲は限定されており、関心の対象はさらに狭く限定されている。さらにインクのしみが、大多数の人が共通にもっている或るもののイメージに非常に近いという場合もある。それゆえ内的な仕事は、理論的、抽象的に考えるよりずいぶん容易であろう。広

大な宇宙を駆け巡ってひとつのものを探し出してくるといったイメージは改めねばなるまい。しかしそれでも、ときにかかなりの心的エネルギーが費やされる。

TATで触発されるのは人間場面のイメージにほぼ限定されている。だから自由さは少ない代わりに、内的な仕事はロールシャッハ・テストにおけるより容易だと言ってよいであろうか。おそらく人間場面も無数にあると言ってよいだろう。そう考える限り、仕事は容易とは言えまい。しかし人間場面はいくつかの要素からなるもので、要素の組み合わせの典型的なパターンというものが想定されるのであり、無数と見えるものも実は有限な数の典型的パターン——たとえば、母親からの息子の自立、親から習い事を強制された子どもの苦しみ、など——のヴァリエーションと捉えることもできるのである。したがって、探索と選別に関しては、TATはロールシャッハ・テストより楽かもしれない。しかしこれは被検者が典型的な状況のパターンのイメージを内に蔵していることが前提であり、状況のパターンのイメージを形成すること自体、たんに事物のイメージをもつことより複雑な心的作業であることを考えれば、どちらのテストの方が仕事量が少なくすむかをかんとんに言うことはできないのである。

ところで絵からある状況のイメージが触発されるとき、絵のなかの何が、どんな要素がとくに決め手になったのかと問うことができよう。ロールシャッハ・テストにおいてインクのしみの色が、あるいは陰影が形態以上に見立ての決め手になっていないか問うことができるように。そこまで踏み込んでこそ、被検者に親近な場面の親近さの意味がよりよく照らし出されるであろう。しかしやはり、これについてもあとでより詳しく述べようと思う。ここでは、ロールシャッハ・テストは比較的単純なものを広く探索しなければならぬのに対し、TATは、探索の範囲は狭いが、比較的複雑なものを入念に選別しなければならない、と両テストを対比しておこう。

IV 解釈の水準

1. 対象が人間の場合

これまで述べてきたようにTATは、「何であるか」ではなく「いかにあるか」を問う課題であると言えるが、ロールシャッハ・テストにおいても「何であるか」とどまらず、「いかにあるか」を述べ

ている反応が出現する。そういう反応こそ上質の反応と言えるのである。

たとえば、インクのしみに人間を認めたら、人間であるとするだけでなく、その人間が何をしているか、どういう姿勢でいるかにまで言及することが、むしろふつうなのである。筆者はかつて、『精神診断学』に掲げられた事例において、反応内容から人間（全身）反応とされているもののうちの85%以上が、決定因から人間運動反応とされていることを指摘し、その理由のひとつを、上述のような、人間の存在を認めたとき、その人間の行為や姿勢にまで言及するわれわれの本来的性向に求めた（鈴木, 1998）。対象をわかろうとする意志が自然にそれを招くのである。

ところで、この「わかる」ことを「意味づける」ことと言い換えてもいいが——「わかる」=「解釈する」: interpret=make out the meaning of——ロールシャッハ・テストの内部においても、意味づけの仕方には水準の違いが認められる。

たとえば、同じインクのしみを見て、ある人は、二人の人がしゃがんだ姿勢で手を合わせていると言い、別の人は、二人の人がある儀式的なかで手を合わせて何かを誓い合っていると言う。前者は、身体の動作、姿勢の在りようを描写しただけだが、後者は、さらにそれを意味づけている。このようなより高次の意味づけを文化的意味づけということができようが、それでもロールシャッハ・テストにおいてはふつうこの水準までである。人間の情緒的關係など、心理面にまで言い及ぶと——たとえば、「二人の女性がバーゲンセールで、『これは私のものよ』と品物を恥も外聞もなく取り合いっこしている」など——行き過ぎの印象を受ける。あるところまでは被検者のある種の内的豊かさ、活発さを感じさせるが、それを越えると、病的過敏さ、さらには妄想性を印象づけるのである。

他方 TAT では、人物間の情緒的關係、人物の内面の叙述こそが求められている。たとえばカード4の絵は、男がその場から去ろうとするのを女が止めていると見られやすいのであるが、こう言うだけでは課題を果たしたことになる。男はなぜ、どういう考えからどこへ去ろうとするのか、女はなぜ、どういう気持ちで男を止めているのか、そもそも二人はどういう間柄か、などのことが述べられる必要がある。これらを満たしていないと、物語作りに失敗しているとみなされるのである。

このようなことは、直観的に判断されるのであり、それゆえ、ロールシャッハ・テストにも TAT にも、自然な、あるいは適度の意味づけというもののおのずからあるのだと言えよう。TAT ではごく自然でノーマルなもの、教示において求められているものが、ロールシャッハ・テストでは不自然でアブノーマルなものとなるのである。逆に、TAT で、ロールシャッハ・テストの水準にとどまる意味づけは、ほとんど失敗反応とみなされる。

ところで、上述のような、ロールシャッハ・テストの人間運動反応と TAT の人間場面 (human situations) の語りにおける現象的な心的プロセスの基盤はどのようなものであるのだろうか。ロールシャッハ・テストの人間運動反応を手がかりにもう少し突っ込んだ考察を試みる。

ロールシャッハ・テストの反応はすべて、出会う対象をわかろうとする人間本来の性向から生じているのだが、少なくともインクのしみに人間を認めるときには無意識裡にその人間になろうとしていると言える。すなわち、この場合わかろうとすることは、なろうとすることなのである。このことは、現実生活の多くの状況で気づかれるし、また脳科学の分野で、それを生物学的に基礎づけるような発見がなされている。それはミラーニューロンという特殊なニューロンの発見である。ミラーニューロンとは、自分自身がある動作を行うときも、他の個体が同様の動作を行うのを見るだけのときにも同じように活動するニューロンを言う。ミラーニューロンという命名の由来は、他者の動作を見て、あたかも鏡像のように、自分も同じ動作をやっている——少なくとも表象上——らしいことを示すニューロンであるということであろう。

ミラーニューロンの存在が裏づけるように、われわれは、他者を見るとき、おのずとその人の行動をなぞっていると言える。要するに他者になろうとしているのである。

ところでこのような内的プロセスにおいて仮定されるのは、ボディ・シェーマ (身体図式) である。他者の行動を見るとき、われわれに生得的に内在するボディ・シェーマが働き出し、これによってミラーニューロンが活動すると考えられる。あるいは、これの逆で、ミラーニューロンの活動によってボディ・シェーマが働き出すのかもしれないし、そもそもそういう時間的機序を考えるのが適切でないのかもしれない。それはともかく、Rorschach が運動感覚

と呼んだものは、このボディ・シェーマと同じものではなかったかと思われる。彼の学位論文は、反射幻覚に関するものだった。反射幻覚とは、たとえば、誰かがタバコを吸っているのを見つめているとき、その人の口の動きのように自分の口も動き、自分の口がタバコを吸っているかのように感じる、といった、何らかの知覚のあと反射的に何らかの幻覚過程が生じる現象である。まさしくボディ・シェーマの介在を印象づける現象である。その活動の病的亢進が反射幻覚と言えるだろう。ボディ・シェーマの鮮明さや強度には個人差があることであろう。Rorschach その人のそれは格別に活発であったようである。そのことは、論文のなかで、反射幻覚の例としてではないが、問題提起のために例示の最初に掲げている彼自身の夢——病理解剖に立ち会った日の夜見た、自分自身の脳が横断的に切片にされ、両半球の塊から次々と前方に落ちていくという夢——からも推察される。ひょっとしたら、反射幻覚に類するような体験があったからこそ、それを学位論文のテーマに選んだのかもしれないとさえ思われる。

さて、現実生活においてのみでなく、ロールシャッハ・テストにおいてインクのしみに人間を認知するときも、上述のようなボディ・シェーマがおのずと働いて、その結果人間運動反応が生じると思われる。ボディ・シェーマは人間運動反応の身体的基盤であり、低い意味づけの水準の運動反応はもちろん、高い意味づけの水準、筆者が言うところの文化的意味づけの水準の運動反応もの前提になっていると考えられる。

ではTATの人間場面の語りにおける心的プロセスを支える基盤はいかなるものであろうか。

TATでは、人物の動作や姿勢は、その内容（何をしているか）はともかく、その基本的認知の面では、ほとんど不確かさの余地はない。それで語り手の注意は、より微妙な、人物の顔の表情にいく。表情から、一瞬のうちに人物の内的状態、すなわち彼（彼女）の想念や感情を見分ける（identify）ところから物語作りは始まるのである。

今表情と言ったが、TATの絵シリーズには、人物の顔が見えない、あるいははっきりしない——人物が後向きであるために（3BM, 12M）、人物が自らの手や腕で顔を覆っているために（3GF, 13MF）、人物が暗闇のなかにいるために（14, 20）、人物の姿が小さすぎるために（11, 17GF）、そもそも

人物が描かれていないために（12BG, 19）——絵も少なからずある。しかし、それらのうちのいくつかのもの（3BM, 3GF, 13MF, 20）では、人物の動作、姿勢が一般に特定の感情と結びついているので、顔自体は見えなくても、内的状態を見分けるのにさほど難儀しないですむのである。たとえば、床にへたりこんでソファか何かに突っ伏していれば、喜びの感情や旺盛な活力ではなく、逆の状態が連想されるだろうし（3BM）、手や腕で顔を覆っていれば、泣いているという解釈が自然に生じるのである（3GF, 13MF）。

しかし、こういうふうに言うと、ロールシャッハ・テストでも、インクのしみに認知した人間像から感情を読みとることができるのではないかという疑問が呈されるかもしれない。確かに、すでに触れたように、そういうことはあるし、さらに人物の顔の表情すら見分けることもある。しかし不定形のインクのしみに、特定の感情と結びついた動作、姿勢を見たり、感情表現である表情を見分けたりすることは、本人自身の、特定の感情に対する特別の親近性を物語るものであり、TATの場合と同列に論ずることはできない。

以上のように、補足的な注釈は必要なものの、TATでは、顔の表情という、身体全体の動きをマクロにみならず、マイクロというべきものが見分けが問題になっている。そして、ロールシャッハ・テストの人間運動反応においてボディ・シェーマの介在が仮定されたように、TATでの表情の見分けにも、生物的な基盤があると仮定される。それは、乳幼児の顔あるいはそれを模したものへの反応の研究結果からも許されよう。乳児はとくに人の顔に似たものを好んでみ見るといふ機構をもっており、生後2ヶ月以降に働き出すコンラーンという機構によってさまざまな人間に共通する顔の特徴を蓄積し、平均的かつ典型的な顔らしさを形成していくらしいのである（無藤, 1994）。

2. 対象が人間以外のもの——動物および無生物——の場合

Ⅲで述べたように、ロールシャッハ・テストでは、インクのしみによって触発されるものが森羅万象に及び、ものの世界とのかかわりの様相が明らかにされうるといふことを示唆したのであるが、TATとの大きな相違点であるこのことについてもう少し詳しく考察してみる。

インクのしみを人間に見立てるときには、彼（彼女）が何をしているのかにも言及するのが自然な傾向であるが、人間以外の動物や無生物に見立てる場合にも、単に何々と名指すだけでなく、それがどのようにあるかまで述べる人が少なくない。動物の場合には、人間に準じて、主にその動作や姿勢が述べられるのだが、無生物の場合には、立体感や質感が述べられるのである。これも自然な傾向と言え言える。なぜなら、実在する事物はすべて、形を持ち、色（無色透明という色も）をもつが、また、一定の嵩をもち、三次元の空間に位置している。さらに特定の素材からなり、表面は特有の質感をもっている。したがって、動きや立体性や遠近に言及したり、質感を述べたりするのは、ものをリアルに感じていること、ものの実在性に迫る力を意味しているといえるのである。これはとりもなおさず、少なくともある面での生き生きした心の証明である。

しかしひとりの人が、これらのものの属性すべてに等しく反応するとは限らない。ある人は質感よりも、立体感や遠近に敏感で、別の人はその逆ということが起こりうる。したがって、インクのしみにある特定のものを認知したのち、その諸属性を感じ取るというより、特定の属性への敏感さに方向づけられて、その属性を顕著に示すある特定のものを求め、それを認知すると言ったほうがよいかもしれない。それゆえ、先に問題にした、森羅万象への関心に、特定の属性への関心や好みを含めるべきであろうと思われる。いずれにせよ、最終的にある特定のものの、形だけでなく、その存在を生き生きと感じ取っているとき、その人は、そのものと強く同化し、ほとんどそのものになっていると言えないだろうか、人間を認めたとき、その人間になろうとするように。たとえば、ある人はカードIVで、蛾という反応（全体反応）を与え「幼虫に羽が生えて蛾に成長した。太くて柔らかい感じ。湿っぽい。デリケートで弱々しい。羽は枯葉のようにかさかさしている。なにか怖い感じがする」と説明している。また同じ人はカードVIで「落ち葉に見える。かさかさした葉。外側が少しずつ欠けている。陽に当たっていない感じ。色の黒いところは少し湿っている」という反応を与えている。これらの反応はいずれもある種の生々しさをもっている。たんなる蛾や落ち葉の認知を越えて、被検者自身の強い思い入れを感じさせられる。これらはむしろ標準を越えた意味づけで、それ自体問題を孕んでいるが、一般に鮮やかに認知された事物は、

認知した人の欲求や恐れや嫌悪を表すという意味で高い象徴価をもっているとみなしてよいように思われる。

さて、TATでは、事物はどのように問題になるのであろうか。人間の場合と同様、TATでははじめから事物は事物として描かれている。いくつかの絵のなかのある事物は、多少あいまいな描き方をされていて、見る人によって見立てが異なるが、そういう場合でも、事物は一種のそれらしさをもっており、しかも絵の他の要素からそれが何であるかの可能性はさらに絞られるのである。もちろん、あいまいなものを何に見立てるかということ自体に意味があるわけであるが、そういうところにTATの投影法たる所以を見るのは正しいとは言えない。それはTATの本質ではない。TATでは、はっきり描かれた事物がもつさまざまな意味や価値のうちのどれを感じ取っているかが問題になるのである。たとえばカード1の絵には、机に向かって座った男の子が頬杖をついて目の前のヴァイオリンを眺めているところが描かれている。ヴァイオリンには少しもあいまいさはない。90パーセント以上の人がヴァイオリンを認知するのである。したがってその部分にヴァイオリン以外のものを認知したり、まったく言及しなかったりしたとしたら、特別にその意味を考える必要があるのである。さて、ヴァイオリンはさまざまな意味をもっている。それは楽器であり、しかも上手に演奏するには忍耐強い練習が必要な楽器である。また、それは、品物として、かんたんには手に入れられない高価なものであり、かつ大事に扱わねば壊れてしまいかねない繊細なものでもある。絵を見る人が、これらの意味のどれをより強く感じ取るかによって、生じる物語も違ってこよう。たとえば「少年がヴァイオリンの練習で壁に突き当たっている」というような物語は、ヴァイオリンから上達が困難な楽器を感じ取った物語であり、「少年は父親のヴァイオリンを父親の留守中に勝手にいじっていて壊してしまった」というような物語は、ヴァイオリンの、子どものおもちゃでない、扱いには細心さを要するものという側面をより強く感じ取った物語と考えられるのである。その他のカードでも、事物は大なり小なり物語の内容や性質を方向づける力をもっている。

ところで、TATの絵カードのなかには、人間が描かれていないといえる——例外的に人間の存在を認める人がいたとしても——もの（12BGと19）

および、ごく小さな、人間と見れば見えるが定かでない形象を含むもの（11）がある。さらにこれらのカードにおいては、絵全体に不明瞭さがある。それで被検者は、ロールシャッハ・テストと似たような課題の前に立たされるであろうと考える人もいる。果たしてそうであろうか。筆者は、この場合にも本質的に異なる課題が問題になっていると考える。

何らかの形で人間あるいは人間的なものが導入されることがない限り、物語は成立しない。絵にもの世界や自然の情景だけが描かれているとしたら、それらが人間にとってもつ意味、あるいは人間のそれらへの態度が語られたり、ものや植物を擬人化して、人間的な世界が語られたりすることになるのである。たとえばカード19では、厳しい環境のなかにある家や船が認知され、内部の人々が守られているさまが述べられることが多く、12BGでは、絵の情景全体が、人々がくつろぎに来る場所ととらえられたり、木が、太古から人間の営みを見守ってきた存在とされたり、ボートが、人々から顧みられることなく放置されてさみしい思いをしているとされたりする。これらの意味づけや象徴的把握は、人々に共有されている事物の意味や象徴のなかから絵によって呼び出されたものであると言うことができ、ロールシャッハ・テストの事物反応にときに認められるような積極的創造による被検者全体の象徴的表現という趣はない。

V 反応への文化の影響

前章1で、ロールシャッハ・テストの人間運動反応の意味づけの水準の違いに触れ、単に人間の動作や姿勢を叙述するのではなく、それを越えて、皆の共通理解となっている行動カテゴリー——たとえば踊っている、祈っている、争っている、など——のどれを行っているかにまで言及することを文化的意味づけと呼んだ。これだけをもってしても、反応への文化一般の参入はわかるが、より直接的に、特殊な文化の影響が見てとれる場合がある。たとえば、カードⅢでの「キャイン」やXでの「バイキン」などである。前者はあるテレビ番組でおなじみのポーズ、後者は虫歯予防のキャンペーンなどで親しいものになっている戯画の連想である。漫画や劇画を好む若い世代には、それらの直接的影響が目立つように思われる。

しかし文化の影響は人間反応にのみ見られるので

はない。インクのしみを人間以外のものに見立てる場合にも、自分が属している文化における森羅万象の見方に大いに影響されるのである。たとえばカードIでの「こうもり」という反応は平凡反応であるが、現物のこうもりをまじまじと見たことのある人はどれだけいるであろうか。こうもりは、現実の世界でより、むしろ物語や絵本のなかで出会うことが多い動物である。絵本や物語の挿絵で知っているこうもりをインクのしみに認めるとというのが正しいところであろう。実際にこうもりをよく知っている人、あるいは事物の精緻な観察者はかえってこうもりを見ないのではないかとさえ思われる。因みにRorschachは、自分の主観的な評価に従えば、カードIでのこうもりは良い形態把握ではないと言って、暗に自分にはこうもりに見えないことを示唆している。彼にこうもりが見えないのは、彼が生来の画家で、形態を正確に把握する人であったがゆえかかもしれない。平凡反応というものは、文化を吸収していない場合だけでなく、文化を超出している場合にも生じない可能性があるのではないだろうか。

別の例として、カードVで、はじめ蝶を見ながら、その後、黒いから蝶でなく蛾にするという場合があげられる。われわれの目にしやすい大型の蝶はアゲハチョウでそのほとんどが黒っぽい色をしている。他方大型で黒い蛾は実際にはいない。それなのに、少なからぬ人々が上のような変更をするのは、蝶は華やかで美しいものという社会的通念のなせるわざであろう。

このように、実際の直接的観察に基づくというより、自らが浴している文化における通念に支配された反応の例は他にいくらかであろう。ひょっとしたらたいの反応がそのようなものであるという可能性すらある。特異でないロールシャッハ反応は、社会の通念にくるまれた反応であり、それはそれで意義があろう。

TATにおいては、文化の影響はいっそう明らかである。いかなる物語、いかなる場面解釈も、語り手が浴している文化に規定されている、あるいは文化そのものであるからである。

たとえば、ある人がカード1で「男の子はもっと小さい頃に親に言われるままにヴァイオリンを習い始め、これまでがんばってきたが、今行き詰って上達しなくなった。それで、いっそ稽古をやめてしまおうかと悩んでいる。しかし気を取り直して練習に励み、スランプを脱していった」という物語を作っ

たとする。この種の物語はしばしば出会うもので、それゆえ「平凡反応」に属するといってもよい。多くの人に共通に認められる内容であるということは、それが、各人の個性、独自性を表してはいないということである。では何を表しているのでしょうか。それは、語り手が、かなり広範囲にわたって支配している文化に浴しているということ、ある文化圏というべきものに属しているということの意味しているであろう。上掲の物語に即してより具体的に言うと、いわゆる「中流」の文化圏である。語り手は、子どもの習い事、稽古事を見取っているわけだが、子どもとヴァイオリンを見て、そういうものを連想するには、子どもの教育のことを考える愛情と責任感をもった親、ヴァイオリンを買い与えることができるだけの経済力、子どもが親の期待に感じるプレッシャーなどのことが、ごくあたりまえのこととしてあらねばならない。

これらの最良の条件は、語られた子どもと同じ経験をしていることである。これに次ぐのは、ヴァイオリンを習ったことはなくても、ピアノを習ったことがあること、さらには、楽器は習わなかったけど、その他の習い事をさせられたことがあること、などである。すなわち「中流家庭」に育ったことが必要条件と思われるのである。そしてそれゆえに、それが上掲の物語の解釈の主要部分となるのである。

しかしここで反論が生じよう。当該の物語が生み出されるためには、必ずしも中流家庭で育つという現実経験は必要条件ではないのではないか、たとえそのことが十分条件だとしても、と。たしかに現実経験はなくとも、強くそれを願望し、さまざまな材料をもとに空想していれば、当該の物語と同様な物語を作ることなど容易かもしれない。ひょっとしたら現実経験のある、恵まれたゆえにぼんやりした人よりずっと生き生きとした感情移入や細部の具体性に富んだ物語を作るのではないかとさえ思われる。すると、経験的事実でないことを事実とする解釈の誤りを生じる可能性がでてきはしないかと危惧される。そしてこの問題は、事実とは果たして何かという根本的な問題につながっていくだろう。これは簡単に片づけられる問題ではないが、ここでは差し当たり、現実の経験に基づくにしろ、強い願望に裏づけられた空想に基づくにしろ、語り手は、中流の文化を生きていた、そしてそのことが物語産出の条件となっていたと主張しておきたい。

ところでロールシャッハ反応に、より直接的ある

いは表層的に当代流行の文物、芸能の影響を受けたものがあるように、TATの物語にも、広く一般に流布した文学作品や映画、テレビ番組の内容が反映されたものが生じる。

たとえば、カード17BMで、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』と同様の物語を作る人がいるし、またある語り手は、昨晚これこれのテレビドラマを見たので、それがそのまま出てきてしまった、などと言う。

これらほど直接的でないにしても、新聞報道や週刊誌の記事、あるいは小説や伝説から引いてきたことが明らかな物語も少なくない。たとえばカード11での竜退治の物語や13MFでの殺人事件を述べた物語である。

これらのことから、文化の影響というとき、文化には、生活経験あるいは強い空想を通して生きられた文化と文物や芸能を通して知られた文化とが区別されねばならないようである。

しかし実際の文化は両者に截然と区別できるものではなく、理論的に考えられる両極端をつなぐ直線上のどこかに位置づけられるという体のものである。知られた文化の極にあるとみなされるものが、絵を見たとき即座に思い浮かべられるような具体的な小説や映画の知識であろう。そのような小説や映画は、現在の、記憶に新しく、それゆえによく消化され、深く取り入れられたとは言い難い。それらに表された共感を呼ぶ人間典型や運命的状況などは、人々に広く話題にされ、また類似のものが探し求められたりする過程で、個別的具體性を失い、心に深く浸透していくものであると思われる。たとえて言うなら、きのう教科書で覚えたばかりの知識は、まだ教科書のなかのある頁の、それが記載された位置とともにあるが、他の書物や教師の説明によって、それから解放され、それに依存しない応用のきく知識として心に定着していくが、そのようなものか。あるいは、加齢とともに、知人の顔や性格はよく覚えているのに、固有名詞たる名前がでてこなくなるが、そういったようなことか。

このような観点に立つとき、ロールシャッハ・テストでもTATでも、個別的、具体的なものが連想され、それをもとに反応が与えられる場合には、その人にとっては、その含意するものが普遍化されるまで消化されていない、すなわち強い印象を受けているがまだ表面的な理解にとどまるという解釈が可能であろう。

さて本節のまとめとして、ロールシャッハ・テス

トにおいても、TATにおいても、文化に強く規定された事物や状況のイメージが現れることが多く、前者では、それらの一部は平凡反応として正当な評価を受けているが、後者では、物語は idiographic（個性記述的）なものという先入見が強く、頻度の高い物語類型の意味が正しく理解されていると言ひ難いということ述べておく。

VI 明らかにする心の層

最後に、TATとロールシャッハ・テストでは、明らかにする心の層あるいは相の違いがあるのか否かの問題をとり上げておきたい。

まず違いはあるというのが大方の意見であろうと思われる。Stein, M.I. (1948) は述べている。「ロールシャッハ・テストは主にパーソナリティの構造に関するデータを提供してくれるので、多くの心理学者は内容的素材を提供してくれるテストの必要を感じてきた。患者にロールシャッハ・テストのみを実施した心理学者は、多くの場合、患者のパーソナリティの骨格は得られたけれども、それに生身の形を与えるべき肉は得られなかったと感じた。その結果心理学者たちはますます TAT の方に目を向けるようになっていった。」

このような、ロールシャッハ・テストがパーソナリティの構造を明らかにするのに対し、TATはその内容を明らかにするという見解はかなり一般的だったことは、Holt, R.R. (1958) の次のようなことばからもわかる。「よく耳にする謬見は、『ロールシャッハ・テストはパーソナリティの構造のテストであり、TATはその内容のテストである』という言い方である。」Holtによる批判はしばらくおき、こうした見解の源は、Rorschach その人にあるとも言えよう。彼は体験型について、それは「体験するのに用いる体験装置」であり、「その人がいかに体験する (erleben) かだけを示し、彼がいかに生き (leben), どこに向かっているかは示さない」と言っているからである (Rorschach, 1921)。

素朴にテストの素材と課題を思い浮かべるだけでも、このような見解はある種の説得性をもつ。インクのしみがある事物に見えるということには、ふつうの意味での人間心理は含まれていない。このことは、TATや質問紙と対比すれば歴然とするであろう。

これら2者では、もっぱら人間心理あるいはそれ

に結びついた行動が直接的に問われたり、表現されたりするのである。したがって、ロールシャッハ・テストで明らかにされるものは、人間心理というより心的機能というべきものであろうことが了解されるのである。

しかしすでに述べたように、インクのしみが人間に見られること、しかもときには非常に人間くさい感情と行動が見て取られることもある。そして人間反応はロールシャッハ・テストのデータ全体において非常に大きな比重を占めるのである。したがって、当テストは心的機能のテスト、すなわちパーソナリティの「構造」のテスト——ここでふつう対比的に使われる機能と構造ということばを同じであるかのように扱っていることを容赦されたい——というばかりでなく、立派に「内容」のテストでもありうるのである。

他方「内容」のテストとみなされる TAT も、それのみにとどまらず、パーソナリティの構造をも明らかにしうることを Holt は主張している。彼は、物語の形式的側面の検討からそれについての知見が得られると言うのである。たしかに、物語ごとに異なるテーマやプロットなどの「内容」に対して、一人の被検者の各物語に共通して現れる可能性が高い「形式」的特徴は、人間心理というより心の諸々の機能様態を明らかにすると言ってよい。たとえば、人物の感情や内的状態に関する叙述がどの物語でも乏しい場合には、感情や共感能力の機能水準の低さを問題にしうるのである。

構造といい内容といい、また形式といい内容といい、意味するものは必ずしも明快ではなく、厳密を期すれば、議論はもっと複雑になるが、以上のような議論だけからでも、両テストと心の相を単純に対応づけることは誤りで、相対的に捉える視点が必要であることが理解されるだろう。

さて、上では両テストと心の相との関係が問題にされたが、心の層との関係も問題になりうる。というのは、ロールシャッハ・テストはパーソナリティの無意識的部分を、TATは前意識的部分を明らかにするという見方が、特定の誰彼の見解でなく、支配的な通念としてあるように思われるからである。そのような見解の根拠はどこにあるのであろうか。わからないというのが率直なところであるが、あるいは、心的機能という基本的なものの方が人間心理という複雑な現象より無意識という概念と結びつきやすいからであろうか。

より具体的に、データから実際に導き出されるものにそって考えてみよう。たとえば被検者の情動について、ロールシャッハ・テストは知見を与えるが、それは「情動の安定不安定、情動の強弱、その集中性と拡張性、統制されているか否か、抑圧されているか自由か」に関するもので、「情動の特殊な色合い——快あるいは不快——は、所見から部分的にしか読みとれないのである」(Rorschach, 1921)。このような、情動という心的機能のさまざまな次元の在り方は無意識的なものと言えるだろうか。もちろん、上に挙げたことばはどれも生硬な概念であり、一般の人々に自己の情動がそうした観点から意識されることはないであろう、特別に要請される場合は別にして。それらによって概括される個々の経験的事実が被検者に気づかれていないと言えるかどうかの問題なのである。そうは言えまいというのが筆者の意見である。概念のもととなる経験的事実を問われれば、被検者は思い当たることがあるはずである。またそうでないと、テスト結果のフィードバックも無効であろう。

ロールシャッハ・テストが与える別種の知見についても同様のことが言えると思うが、それのもととなる重要な「運動感覚」について、Binswanger, L. (1923) が、「運動感覚が『最も深い無意識に属する』などとしたら(中略)非常に奇妙なことであろう」と言っているのは興味深い⁽²⁾。やはり、心的機能を無意識と結びつけることの不当さを言っているように思われるのである。

ロールシャッハ・テストが明らかにするのはパーソナリティの無意識的部分であるとする見方の、考えられるもう一つの根拠は、テスト課題とその結果から出てくるものの隔たりの大きさ、「被験者は無害な空想試験だとばかり思っていると、出てくるものははるかに多い」(Rorschach, 1921) という、被験者がだましうちにされたように思いかねない意外性であろう。まさに被験者は無意識的に自己のある部分を明かにしてしまったのである。そういう意味の無意識性ならたしかにロールシャッハ・テストはTATより多くもち合わせている。TATでは、物語を作りながら、自分自身が明かしているものに気づく道は、より辿りやすいのである。質問紙ではいっそうそれが言えるであろう。一つひとつの回答で自己のパーソナリティを自己評価していくからである。だから質問紙はパーソナリティの意識的側面を明らかにするとされるのである。しかし今問題

にしている無意識性は、心の内容の無意識性と同じだろうか。

意識の検閲が効かないから深く無意識的なものが浮上し露出するという可能性はある。しかしだからといって、無意識的だったものだけが現れるとは限らない。このことは、ロールシャッハ・テストの平凡反応といわれているものを思い浮かべるだけで十分理解されよう。逆に、意識的な統制が効くから深く無意識的なものが現れないとも言えない。意識的に統制しているつもりでも、そのこと自体が無意識的動機に支配されてのことであることはよくあるからである。だから質問紙の回答結果からも、見る人が見れば、回答者本人が気づいていない願望や恐れを洞察しうるのである。したがって、この場合にも、両テストと心の層を単純に対応させることはできないことがわかる。

以上のように、両テストがそれぞれ明らかにする心の相や層を単純に限定してしまうことはできそうもない。これだけの議論から結論めいたことを言うことは到底できないが、少なくとも、明快な対応づけは保留しなければならないであろう。

VII まとめ

本稿では、TATとロールシャッハ・テストの相似点と相違点を、心理テスト一般に関するいくつかの論点ごとに両テストを対比しながら論じた。

まず、両テストとも、その課題は出会う対象をわからせようとする人間の本来の性向を一押しするにすぎないことを述べ、続いてテスト素材の成り立ちと性質に目を転じ、ロールシャッハ・テストのインクのしみは偶然にできあがったものであるとみなしてよいのに対し、TATの絵や写真は意図なくしては生じえなかったものであることを確認し、このことが、TAT被検者の正答追求的な反応態度を招き、またTATデータの量的分析を困難にすることを指摘した。次に両テストにおける反応産出に際して働く心的機能と心的プロセスを論じ、ロールシャッハ・テストでは、広く森羅万象のなかから自己に親近なものが呼び出され、TATでは、より狭く、人間場面のなかから自己に親近なものが選別されることを確認し、探索の範囲からすれば、前者の方が多大なエネルギーを要するような印象を与えるが、イメージの複雑さを考慮に入れると、後者の心的作業量も決して小さくないはずで、どちらの方が負荷が大きい

かを単純に言うことはできないことを示唆した。続くIV章では、両テストにおける解釈ないし意味づけの水準を問題にし、まず、対象が人間である場合を取り上げ、ロールシャッハ・テストにおいてノーマルな水準の意味づけもTATでは失敗反応に属し、TATではごく自然な意味づけもロールシャッハ・テストにおいては過剰な意味づけになるというふう、それぞれ異なった自然な、適度の水準があるということを確認し、さらにそれぞれの心的プロセスの身体的基盤に言い及んだ。ロールシャッハ・テストの人間運動反応は、インクのしみに人間像を認めたとき、その人間になろうとする本来的性向によって生じ、その基盤はボディ・シェーマであると思われること、また、TATで重要な顔の表情の見分けにも、新生児や乳幼児の研究から、人間に生得的に備わっている特別な機構が働いているとみてよいことを述べた。そのうち、対象が人間以外のもの、とくに事物の場合の意味づけの水準を問題にし、ロールシャッハ・テストで、事物の形態以外の動き、色、立体感、質感などの属性にまで詳しく言い及んだ反応は、被検者のそれへの同化を感じさせ、高い象徴価をもつとみなしうること、他方TATでは一つの事物がもつさまざまな意味や価値のどれを感じ取っているかが物語の内容を方向づけることを述べた。VI章では、反応への文化の影響を論じ、両テストのどちらにおいても、文化に強く規定された事物や状況のイメージが現れやすいことを指摘し、平凡反応など、よく出会う反応や物語は、当人が浴している文化の取り入れとそれへの適応に不足がないことを表していることを示唆した。最後に、両テストが明らかにする心の相と層の異同を取り上げ、パーソナリティの構造と内容、無意識と前意識など一般に流布した対比の仕方を批判的に論じ、単純な対応づけは困難であるという結論に達した。

は実際に無意識的な事柄を明るみにもちきたらず」とか、運動感覚は「私たちが無意識と呼びならわしているものときわめて密接な関係にあるのにちがいない」とか言ったことになっているのである。

文献

- Binswanger, L. 1923 Bemerkungen zu Hermann Rorschachs »Psychodiagnostik« In Bash, K. W. (Ed.) *Hermann Rorschach Ausgewählte Aufsätze*. Kindler Verlag Gmb, München.
- Morgan, C.D. & Murray, H.A. 1935 A method for investigating fantasies *Archives of Neurology and Psychiatry*, 34, 289-306.
- 無藤 隆 1994 赤ん坊から見た世界——言語以前の光景 講談社現代新書
- Murray, H.A. 1943 Thematic Apperception Test manual Harvard University Press, Cambridge.
- Rorschach, H. 1912 Über »Reflexhalluzinationen« und verwandte Erscheinungen. In Bash, K.W. (Ed.) *Hermann Rorschach Ausgewählte Aufsätze*. Kindler Verlag Gmb, München.
- Rorschach, H. 1921 Psychodiagnostik. Verlag Has Huber. Bern (鈴木睦夫訳「新・完訳 精神診断学」金子書房 1998)
- 下條信輔 1999 〈意識〉とは何だろうか 講談社現代新書
- Stein, M.I. 1948 Thematic Apperception Test An introductory manual for its clinical use with adult males. Addison-Wesley Press Inc. Cambridge 42, Mass.
- 鈴木睦夫 2002 TAT——絵解き試しの人間関係論 誠信書房
- 鈴木睦夫 1998 『精神診断学』私見 鈴木睦夫訳「新・完訳 精神診断学」金子書房 1998

(受理年月日 2004年9月30日)

注

- (1) 2003年度名古屋ロールシャッハ研究会 2004年2月22日 於：名古屋国際会議場
演題「ロールシャッハ法の基本的認識に向けて——TATとの対比から——」
- (2) ここでRorschachのために弁明しておく、引用文中の引用は、もとは、Rorschach自身のことばではなく、彼の講演原稿を彼の死後編集出版——「形態解釈実験の活用」として『精神診断学』に収められた——したOberholzer, L.のことばであり、これを受ける形で、以下の段でRorschachは「運動感覚